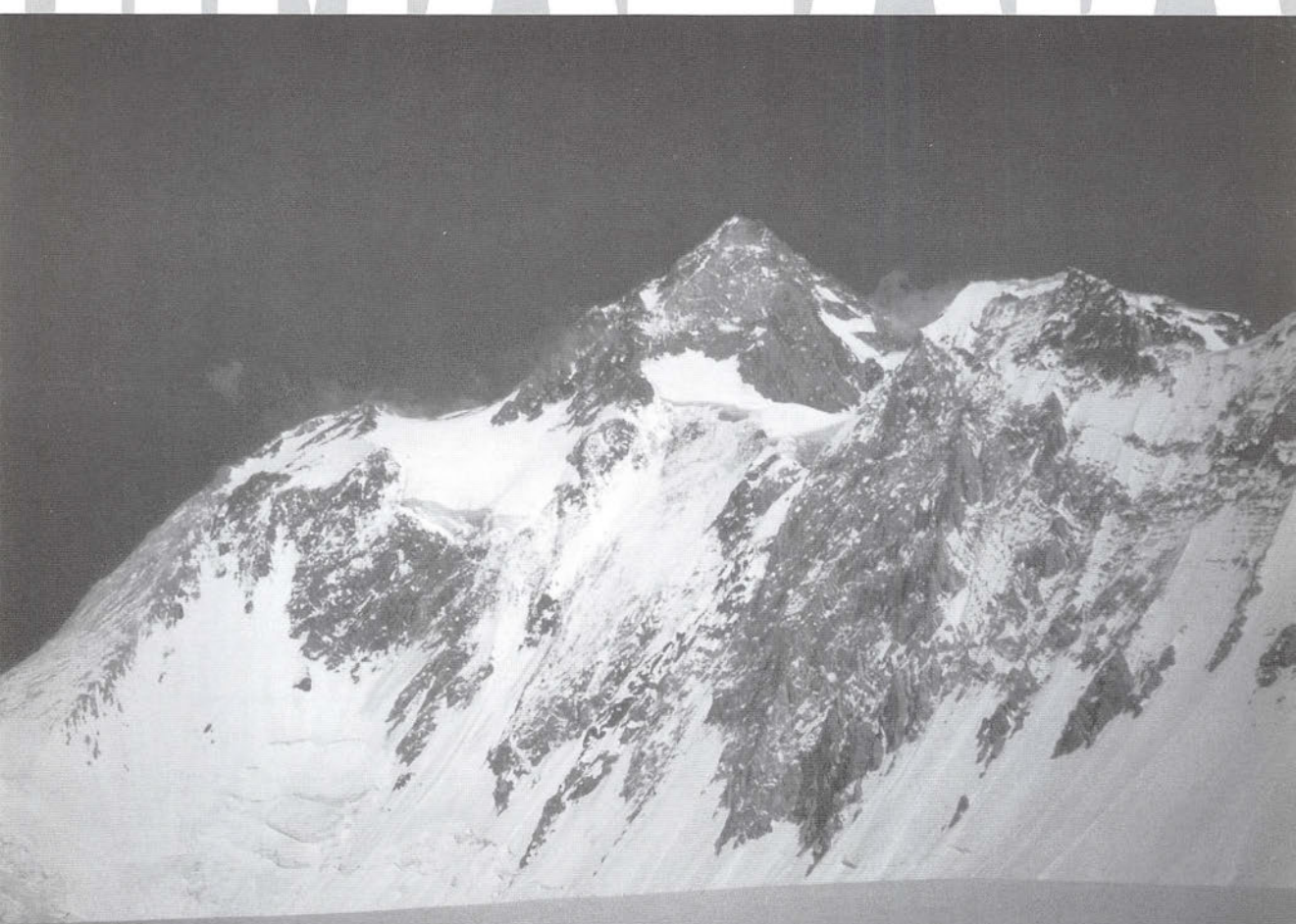


ヒマラヤ

No.373



2002 DECEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2003年H A J サマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク(7,027m)

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題がありますが、情報の収集や強力なスタッフ配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたいと思います。

記

1. 期間：2003年7月18日(金)～8月25日(月)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：11月30日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。高所ポーターは使用しない。

チベット カンペンチン(7,281m)

シシャパンマの北麓の大地を進むと屏風のように白い山脈が連なっています。その主峰がカンペンチンと呼ばれる山です。まるでヒマラヤ山脈を守るかのように立派な牙のように鋭峰(北峰)を持った山です。1982年と1998年に日本隊によって登頂されていますが、ルートはその東面を予定しています。

記

1. 期間：2003年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員：10名程度
3. 負担金：85万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 〆切り：定員になり次第
6. その他：H A Jの登山隊は「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿参加の義務があります。また、高所ポーターを使用しない隊員による自力登山です。

表紙写真

悪い南ガッシャーブルム氷河を登り、広大なガッシャーブルム盆地に入るとG I北西面を望む事が出来る。写真右手に伸びる稜は2年前来日したA. シュトレムフェリ達によって'77年に初登攀された西稜。正面の壁は当時センセーショナルを起こしたメスナー&ハーベラによってアルパインスタイルで登られた北西壁。あらためて偉業を成し遂げた登山家達の足跡を見て感動を覚える。
(写真と文：野沢井 歩)

ヒマラヤ No.373

1. カラコルム、楽しく辛かった夏 日本ヒマラヤ協会カラコルム連続登山隊2002
19. ヒマラヤ・ニュース〈地域ニュース・トピックス・Books〉
21. ムスターグ・アタ最近の現地情勢 南井 英弘
24. 寸感・事務局日誌

カラコルム、楽しく辛かった夏

「ガッシャーブルムⅠ峰、登頂と救出奮闘記」

日本ヒマラヤ協会カラコルム連続登山隊2002

はじめに

私達（日本ヒマラヤ協会、カラコルム連続登山隊）は本年、バルトロ・カンリ～チョゴリザの連続登山を目的として印パ紛争の緊張の中、パキスタン・イスラム共和国に飛び、在パ邦人が帰国避難する中準備を進め、予定通り入山致しました。結果としてはとても紙上を借りて報告出来るような登山は展開する事は出来ず、只々毎日BCで雪見酒の日々。時々晴れ間をぬってキャンプへ行ってくるといった毎日が続きました。それでも許可を取得出来なかったバルトロ・カンリの代りに選んだガッシャーブルムⅠ峰で少しずつ順化活動を続け、8月5日に登頂は出来たものの、帰路、隊員一名が急性高山病となり、残りわずかな日数でワンチャンスと思っていた「花嫁の峰」には手を触れる事も無くダスティンホフマンに新婦を連れ去られた新郎の様な気分を味わいました。といった状況が続き、ベース・キャンプから3日で登頂したGIの下山には一週間の時が必要でした。私達4人以外誰もいない南ガッシャーブルム氷河をツェルトに包んで引き降ろし、支えながら歩き、時には四つんばいになり進ませ、気の遠くなるような時が過ぎました。最終的には日本勤労者山岳連盟K2登山隊の協力を得まして、無事ベース・キャンプに降りる事が出来、晴天期ギリギリのレスキュー劇は終わりました。

情報の溢れた近年、ガッシャーブルムⅠ峰の登山自体にはなんの珍しい事柄はありませんが、他隊の全くいない南ガッシャーブルム氷河で行われたレスキューはあまり例が無いと思われ、これから高所登山を行なう方々の何らかの参考にして頂ければ幸いです。

（記：隊長 岩崎 洋）

チョゴリザへ行こう！

先ずこの登山隊が出来た経緯から記したい。

私達（岩崎、野沢井）は数年前よりカラコルムに聳えるラカボシ（7788m）東面バグロット氷河ルートの計画を立てていた。そして昨年夏、岩崎がパキスタンに単身偵察へと出掛け、その結果は「次の氷河期まで待とう」である。さすがに次の氷河期までは待てないのでラカボシの計画は諦めるしかない。が、チョゴリザ、サルトロ・カンリといった山々の許可が取れそうだという吉報も持ち帰ってきた。こうして私達はチョゴリザを目標の山に定め準備を始めた。

今年2月、日山協海登研の席上で旧知の仲でもある田辺、後藤の両名が私達の計画に参加したいという事で4名の隊員構成となった。この顔ぶれ全員HAJの役員である。当然ここはHAJ隊として派遣したい旨を理事長にお願いした。

さて登山計画であるが、チョゴリザは今だ日本人未踏の主峰（南西峰）をバイン氷河からアルパインスタイルで登る計画である。さてその事前の高所順応として登る山だが、ムスターグ・アタ、パスー、マッシャーブルム、GIなどが候補に上がったが結局チョゴリザからも近いという事でバルトロ・カンリⅢ峰（7,300m）を選んだ。しかし、チョゴリザの許可は取得できたのだが、このバルトロ・カンリの許可は中々発給されない（許可を出す準備はあるという書類は届いたのだが…）。パキスタン出発の日々は刻々と迫っており、結局バルトロ・カンリの許可はパキスタン入国してから頂く事にしてチョゴリザでビザを取得し出発する事とした。これらごたごたの為パキスタン大使館へは4回も足を運ぶ事となった。

（記：野沢井 歩）

バルトロ・キャラバン

6月10日、ちょうど成田空港のテレビのニュースでは印パ紛争激化に伴い避難を開始した在パ邦人の映像が流れている。その人達が乗ってきたPIAの折り返し便に私達は乗り込む訳だ。そんな状態なのでオーバーした荷物のエクセスも要求される事なく飛行機へ乗り込む事が出来た。連日ニュースを賑わせている印パ紛争だがここイスラマバードではいつもと変わらない日常が展開している。岩崎隊長はイスラマバードの日本大使館へ挨拶に行ったら「知ってて来たんですか！」と厭味を言われたらしい。

さて心配していたバルトロ・カンリの許可だが、やはり許可取得は困難でその代替えの山としてガッシュャブルムI峰（以下GI）へと変更した。そしてルートは北面ジャパニーズ・クローワール。このルートの初登攀は私の所属するパーバリアンクラブ代表、清水修氏が'86年に初登攀してこの名が付けられているのだ。これはぜひ登っておきたい山、ルートでもある。こうして私達はアブルツィ氷河にBCを設け、まずGIを登り、BCは動かさずそのままチョゴリザを登る計画とした。

11日～12日、装備の梱包、外国人登録、リエゾンとの打ち合わせ等の仕事を行なう。それにしてもイスラマバードは相変わらずの猛暑。仕事はそこそこに冷たいビールで酒盛りが始まる。この必須アイテムのマリービールはパーミットを取って160本程買い込んだのだ。これで登山終了後も安心だ。

13日、夜行のローカルバスでスカルドへ。



▲ローカル・バスに荷物を満載して出発

ビール・ワダイのバスターミナルへ行くと私達の乗るマッシュャブルム社のバスの屋根には先客の荷物が既に満載されている。これでは私達の大量の荷物を積み込む事は不可能に思われたが何とかになってしまうものでなだかんだで無事取まってしまうのが不思議だ。17時過ぎに出発。灼熱地獄だったカラコルム・ハイウェイの旅もアボックバードを過ぎる辺りで激しい雷雨となり随分と涼しくなった。

14日、途中パンク修理でかなり時間をロスしたが、朝8時にチラスへ到着。ここから52km先のラキオト橋でインダス河を渡りハイウェイは右岸沿いに行く。上流にはラカボシ、ハラモシュなどの山々が望める。しかし残念ながら巨大なナンガバルパットは雲の中である。ジャグロットを過ぎるとヒンドックシュ、カラコルム、そしてヒマラヤ、これら3つの山脈の合流点となるモニュメントがある。その先でギルギット河を渡りカラコルム・ハイウェイを離れる。そしてスカルドまで100kmの道のりはインダス河沿いの険しい渓谷沿いに付けられている。

夕方6時半、スカルドへ到着し25時間余りの長いバスの旅は無事終わった。

15日、スカルド準備。食糧、ケロシン等の買い出し。そして25kgづつ荷物を梱包した。ここで瓶詰めの調味料、ジャムなどは全てペットボトル等に詰め替え瓶製品は一つも無い様徹底的にテイク・インしたのだが、結局BCでコックが他の登山隊から瓶に入った見慣れない食品を大量にもらってくるのであった。

16日、早朝2台のジープで出発する。曇り空の



▲道路崩壊の為ジープを乗り換える

▼アスコーレに集結した隊荷とポーター



中、このオープンタイプのジープは非常に寒い。シガールを過ぎ、ハイドラバードで朝食。ここでチョゴルンマ氷河方面への道と別れる。陽も昇りジープの旅も快適となってきたが、ダスーを過ぎた辺りで道路は決壊、そこでジープを降りる事となった。かなり歩くのを覚悟していたが、すぐ先に別のジープが待ち構えており難くアスコーレまで入る事が出来た。アスコーレは風が強く砂埃が舞っている。そして夕方から激しい風雨となった。

17日、小雨の中48名のローカル・ポーターへ荷物を託し8時前に出発。キャンプサイトから一段高台に上がると緑豊かなアスコーレの村が広がる。村を抜けるとブラルド川沿いの道となる。荒涼とした中に咲くワイルドローズが美しい。左からピアフォー氷河が合流しコラフォンだ。小1時間程歩き、デュモルド川が合流する。デュモルド川を少し溯り渡しカゴに乗り対岸へと渡る。以前は更に上流にこの渡しカゴがあったが今では橋が架けられている。今回は印パ紛争の為大量の物資を渡



▲荒涼とした中に咲くワイルド・ローズ

▼ジョラの「渡しカゴ」に乗る田辺

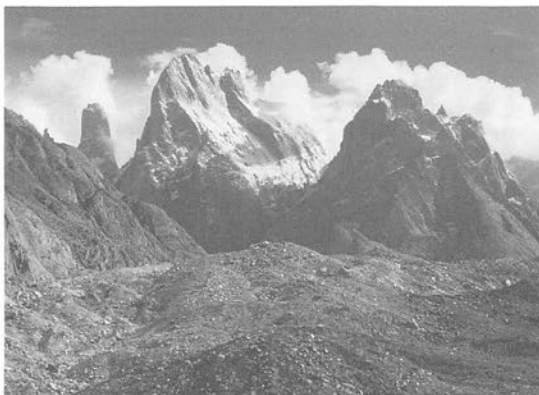


す為か再びここにこの渡しカゴが作られたのであろう。そしてこの辺りの高巻き道もハッパで崩され安全な道が付けられている。こういった紛争のおかげで辺境地域が楽にアプローチ出来る事はなんとも皮肉な結果といえる。

18日、曇り空で涼しい中、ブラルド川沿いの広い河岸段丘を進む。右岸に聳えるパイユ岩塔群が立派だ。そこから押し出されたゴーロ帯を越えると緑豊かなパイユに到着。キャンプ地は1日早く出発していたブロード・ピークの国際隊にほとんど占領されていた。

19日、本日はレスト。ここでポーター達は一日掛けてバルトロ氷河内での食事用のロティー（パンみたいなもの）を焼く（油で揚げる）のである。このロティーの香ばしい匂いがキャンプ地に充満している。私達はパイユの裏山へ高所順応を兼ねて3800m位まで登る。

20日、パイユより右岸沿いを1時間程進みいよいよバルトロ氷河へと入る。トランゴタワーなどの岩塔群が立派だ。モレーンカバーされた氷河内



▲バルトロ氷河からトランゴ・タワー

▼トランゴ・タワーをバックにボルダーリング

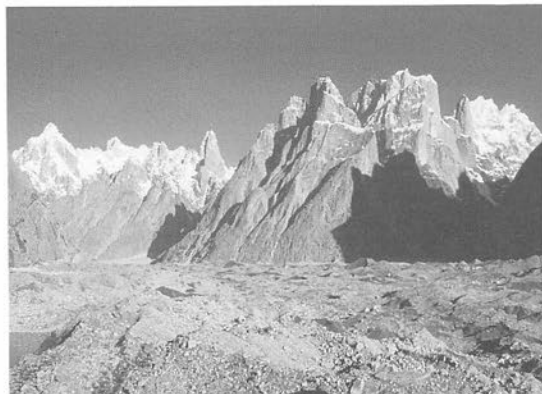


を1時間程歩くが、その後左岸沿いに付けられた道を辿る。リリゴを過ぎさらに1時間弱でホブルツェに到着。この辺り花崗岩の岩がゴロゴロしており今回用意してきたクライミングシューズ、チョークを出してボルダーリングを楽しんだ。

21日、昨日同様左岸沿いのトレースを辿る。2時間程歩くとウルドゥカスだ。ここでも裏山でボルダーリングを楽しむ。後藤は中々センスがある。トランゴタワー、カテドラル、シプトン・スパイヤーといった岩塔群をバックになんと贅沢なボルダーだろう。

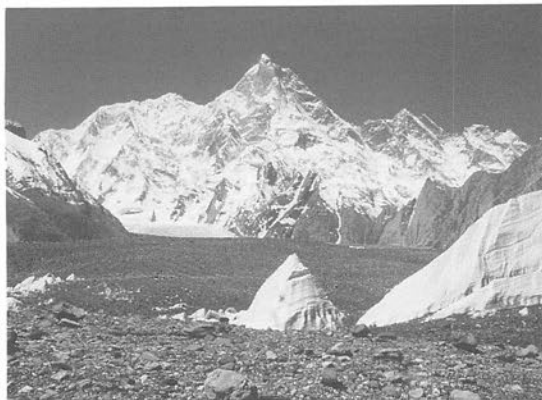
22日、久しぶりの大快晴。ヒマラヤンブルーの空にバルトロの岩塔群が更に映える。ルートはポーターの墓場を抜け再びバルトロ氷河上を辿る事となる。モレーンカバーされた氷河内はしっかりとしたトレースが付けられ、左岸に一際大きなマッシュャーブルムが迫ってくるとゴレⅡ到着。夕方、正面に聳えるGⅣに夕陽が当たるのを期待していたが今一つだった。

23日、今日は私がスピードの遅いリエゾンを連

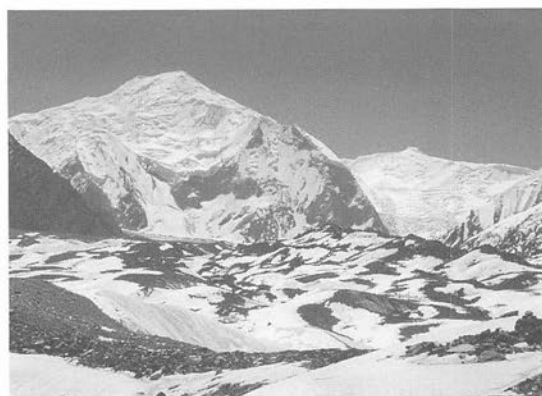


▲バルトロ岩塔群

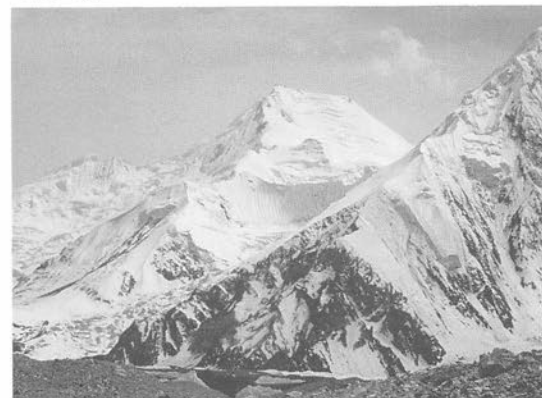
▼マッシュャーブルム



▼バルトロ・カンリ、右手はコンダス・ピーク



れたのキャラバン。全てのポーターに追い抜かれ一番ラストでコンコルディアに到着した。ブロード・ピーク、K2に巨大なカサ雲が掛かっている。悪天の兆しだろう。ここからK2方向のゴードオウスチン氷河と別れ右折する。正面には鋭鋒の多いカラコルムには珍しいどっしりした山様のバルトロ・カンリが大きい。右手にチョゴリザが見え始め15時半シャクリーン到着。リエゾンはクタクタである。



▲シャクリーンからのチョゴリザ

▼G IをバックにBC全景



24日、カサ雲の予想通り朝から悪天となった。小雪が降る中出発。流石に今日はポーターの歩くペースが早い。1時間程で氷河は左に折れ、センターモレーン上に付けられたトレースを辿る。11時ガッシャーブルムBC到着。既にスペインG I隊、スイスG I隊、フランスG IV隊がBC入りしていた。印パ紛争の影響か例年と比べ今年は登山隊が非常に少ない。これでいくらか静かな登山が楽しめる事であろう。ポーターに給料を支払い雪降る中BCを建設した。標高は5100mに合わせ今後、気圧の変化の指針とした。

(記：野沢井 歩)

悪天の中の登山活動

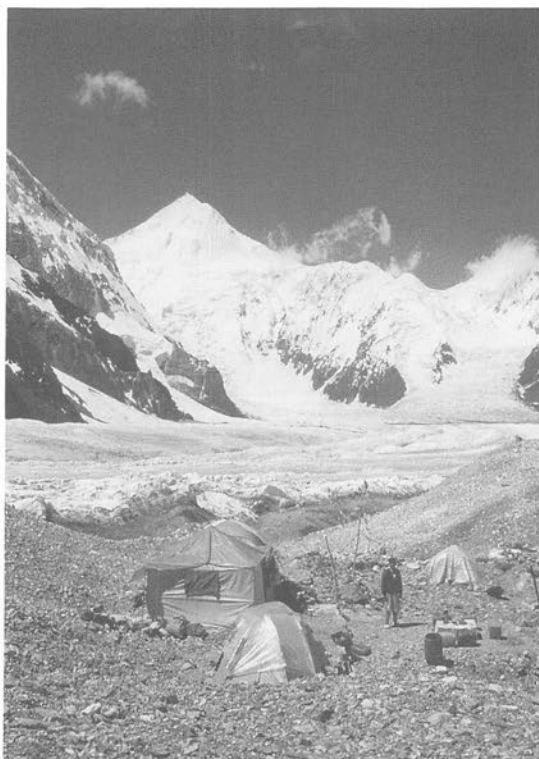
25日、BC開き及びプジャ（チベット仏教系の祈禱）を行なう。この為にネパールで買ったタルチョーを持ってきたのだ。ラマ僧役？はもちろん田辺さんだ。そして虎の子の日本酒も開ける。

26日、G II 登山の韓国隊がBC入りしてきた。



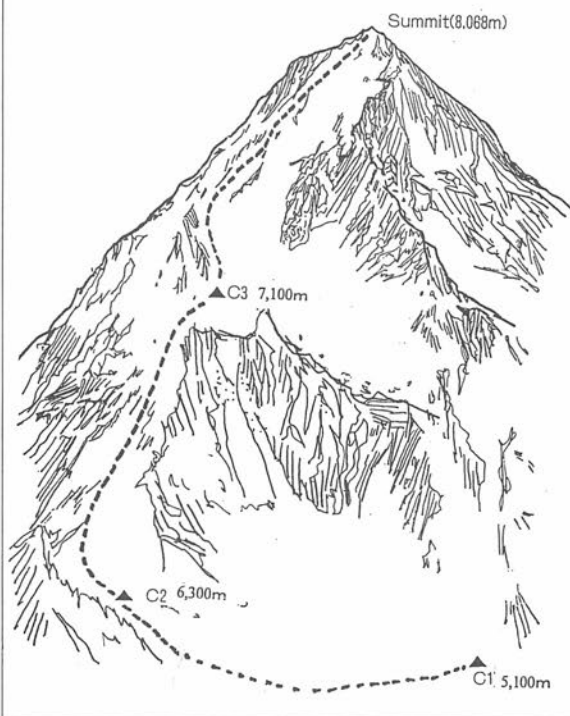
▲韓国G II隊とのひととき

▼チョゴリザをバックにBC全景

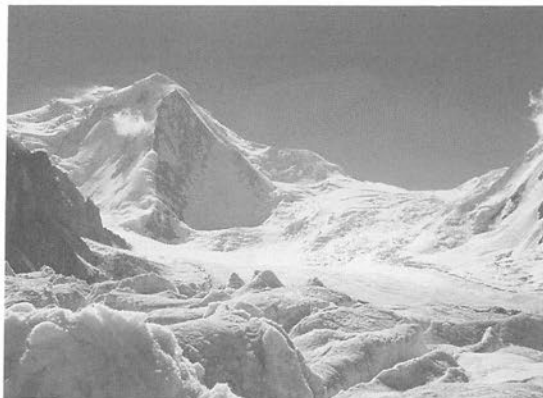


G I北面ルート図

作図：群馬岳連カラコルム登山隊、星野龍史



▼コーンウェイ・サドルとシア・カンリ



この韓国隊は非常にストイックで酒も煙草も持ってきていない。その割にはスルメなど酒の肴みたいな食糧は大量に持ってきていたが…。この隊の最年少隊員のジョー君は人懐っこい性格で毎夜我々のテントへ遊びに来てすっかり仲良しになった。韓国には今だ儒教が色濃く残っており隊の上下関係も厳しくストレス発散だったのかもしれない。

27日、いよいよ登山活動開始だ。夜半の雪も止み、朝8時BCを出発する。GIVのスイス隊が下降してきたトレースを頼りに南ガッシャーブルムへ入る。4人ともこのルートを過去に体験済みだが何度来ても厭なルートだ。とにかくクレバスが多くいつ踏み抜いてもおかしくない。しかもこの日は出発が遅かった為、陽が昇るとクレバスのスノーブリッジは不安定極まりない。中段プラトー手前付近のクレバスは特に大きく開き、飛び越えたり、迂回したりして通過するが、終盤にはこの辺りのクレバスはかなり大きく開きだいぶルートは変ってしまった。この日はここ5400mまでとしBCへ下降する。



▲南ガッシャーブルム氷河

28日、昨日の失敗を教訓に3時に起床、4時半にBCを出発する。下部のアイスフォール帯を抜け、先日の終了点となったクレバス帯を通過する。そこから氷河はプラトーとなる。コーンウェイ・サドル越しにインド領の山々を望む事が出来る。その先は再びアイスフォールで大きなクレバスを巻いたり飛んだりすると広大なガッシャーブルム盆地だ。今日はC1適地までの予定だったが、強烈な陽射しがクレバスを緩め始めているので適当な場所に荷物をデポしてBCへ下降する。

29、30日、BCレスト

7月1日、今回の計画はC2を建設し北面ジャパニーズ・クローワールのルート工作が目的である。前回のデポを回収し5800m地点にC1を建設する。ここ広大なガッシャーブルム盆地のC1は陽射しを遮る物も無く日没まで灼熱地獄である。

2日、5時出発。広いプラトーからアイスフォールを経てガッシャーブルム・ラへ。広大なプラトーは雪が締まっている為、1時間程でアイスフォールへ取付く。右手からセラックの弱点を登る。所々



▲恐ろしいスノーブリッジの通過

▼ガッシャーブルム・ラへのアイスフォール



不安定なスノーブリッジを渡るが南ガッシャーブルムのアイスフォールと比べれば対した事は無い。最後の抜け口に1本固定ロープを張り抜けると、ガッシャーブルム・ラまで再び広いプラトーとなる。北面ジャパニーズ・クーロワールの見える辺りまで登り6400mをC2とする。今回キャンプ展開しているが、上部キャンプに持ち上げているのはエスパース・マキシム1張りだけで、これを随時移動させる方法をとっている。荷物をデポしてC1へ戻る。

3日、C2へ移動。テントを張り終えた後、ロー



▲北面ジャパニーズ・クーロワール

▼クーロワール核心部



プ類登攀具を担ぎジャパニーズ・クーロワールのルート工作へと出掛ける。出だしは緩いクーロワールも登るにつれて次第に急峻となり、この辺りで風雪が激しくなりだした。上下から吹き付ける飛雪にもものすごい寒さである。クーロワールは岩場に遮られどんづまりとなるが、ルートはそこから岩の露出したランペを左上し更に上部のクーロワールへと入る。岩崎・後藤パーティーを待つ間、田辺氏は果敢にこの風雪の中このランペを登り上部の偵察をしてきた。あまりの天候の悪さにここで行動を打ち切る事にして登ってきたクーロワールにロープを3P固定しながら懸垂で下降しC2へと戻った。

4日、終日ホワイトアウトで停滞。

5日、今日もホワイトアウトは変わらず、下降を決める。C1で荷物を整理し更にBCへ向けて下る。

6日～15日、悪天の為10日間に及ぶBC停滞となった。一回BCを出発したがGⅡにもものすごく大きなカサ雲が懸かっているのを見てすぐに引き返した事もあった。

16日、早朝2時に起床。毎朝の恒例となってい

▼クローワールのルート工作



る小キジを打ちながら夜空を見上げる。今日は溢れんばかりの満天の星空だ。これは出発しない訳にはいかない。アタックへ向けてBCを出発する。10日ぶりに入る南ガッシャーブルム氷河はすっかり様子が変わっていた。途中ルートを外してから迷いの様なセラック帯の中かなり迷いだいぶ時間をロスし、中段のプラトーへ出たのは既に正午近い時間となっていた。そして今度は灼熱地獄の暑さと、重いザラメ雪のラッセルに苦しめられ、C1に着いたのは3時半、今日は11時間半もの行動となってしまった。

今回の反省を踏まえ田辺氏は「南ガッシャーブルム氷河スーパーマップ」なるかなり正確な地図を作成した。

17日、C2へ移動。

18日、ホワイトアウトで停滞。

19日、天候は回復し満天の星空だ。4時50分出発。田辺・野沢井パーティーで登攀具を担ぎルート工作。岩崎・後藤パーティーは後ろから天幕などの生活用具を荷揚げするという計画である。ヘッドライトの明かりを頼りにジャパニーズ・クローワールへ入る。前回張ったロープは雪に埋もれて

しまい中々見つけ出せなかったが、なんとか見つけ固定ロープを掘り出しながら登る。ランペの先からはルート工作に入る。残置ロープを使い強引にロープを伸ばす。急峻で雪も深く締まっていなが、岩場に打たれたピトンがしっかりしていて安心である。しかしここを初登攀した清水氏達の苦労が忍ばれる。私達のロープは途中でなくなった為、比較的新しそうな残置ロープを外しそれを固定した。朝の快晴がウソの様に再び風雪が私達を襲い始めた。ここ北面は西からの強風がG1上部より吹き降ろされている様である。9P半でクローワールを抜けたが、その頃はかなりの風雪となった。ツェルトを破りラストの岩崎氏を迎えこのまま前進するか退散するかを相談する。結果退散を決め固定したロープを懸垂で下降する。C2に戻るとあの風雪はウソのように止んでいた。そのままC1まで下降。C1までのプラトーは強烈な陽射しで雪が腐りひどいラッセルとなった。早朝ならば1時間程のところに4時間も掛かってしまった。

午前中の悪天から一転し青空の中G1が悠然と聳えている。



▲風雪の中クローワールをルート工作する田辺

20日、昨日の退散の判断は正しかったようで朝から悪天となった。雪降る中BCへ下降する。

21日～24日、BC停滞。

25日、2回目のアタック。C1に到着するとGⅡを撤退し荷下げに来ていた韓国隊に大量の食糧を頂く。その中には重いレトルト食品や缶詰まで大量にあった。本日の私達の夕飯は沢山のご馳走が並び、今登山中一番豪華な食事となった。

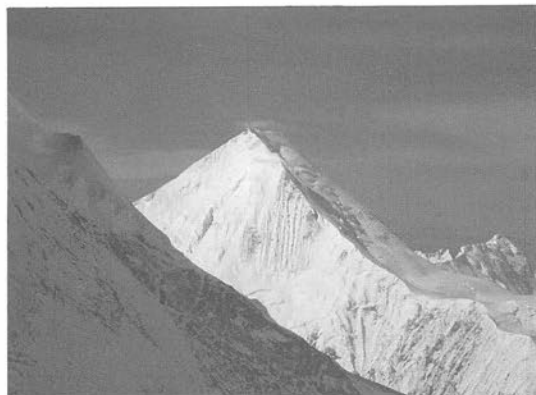
26日、朝、今一つ天候はすっきりとしない。明らかに悪天の兆しである。結局BCへ一旦下る事にする。

27日～8月2日、悪天の為一週間のBC停滞。韓国隊は28日、スペイン隊は31日BCを後にした。これでガッシャーブルムBCに残っているのは私達だけとなった。今年のバルトロはこの悪天候の為、K2、ブロード・ピークもあきらめた登山隊が多い。BCを後にする韓国隊には特に大量の食糧を頂きコックも大喜びだ。それからの私達の食事はすっかり韓国料理化した。BCは私達だけとなった事でこの停滞中2回程南ガッシャーブルム氷河下部のルート整備へ出掛けた。

(記：野沢井 歩)

アタック

8月5日朝2時45分、アタックに出発する。パキстанは今年からサマータイムが導入され1時間早まったため、実時間では1時45分である。月はなく、わずかな星明かりに、目指すガッシャーブルムⅠ峰は黒々とそびえていた。これまで悪天続きのため待ちに待ったチャンスである。アタック



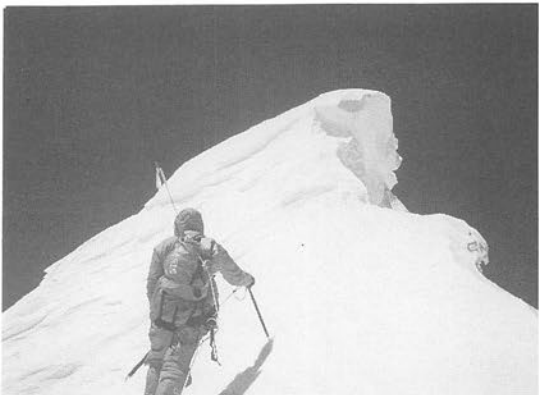
▲クーロワールから見るチョゴリザ

▼頂稜への登攀



クは月夜が望ましいが、贅沢は言っていられない。いつものように、田辺と野沢井、岩崎と後藤のペアでロープを組む。

C3より雪壁を登り、通常C4が置かれるプラトールを進む。下りに備えて赤旗を立てつつ登るが、大クーロワールに入るとき赤旗は尽きてしまった。大クーロワールの中ほどで夜が明けた。下は一面の雲海で、GⅡ、GⅢ、GⅣが頭だけ出している。空は美しく澄みきり、絶好のアタック日和だ。風があって非常に寒い。大クーロワールの抜け口から雪壁を右の上し、小リッジを1つ越える。先頭のラッセルは野沢井と田辺が交代で行ってきたが、このころから私は足が重くなり、野沢井にまかす。「私もそろそろ年だなあ。」と思う。山頂に突き上げる急な雪壁を登っていくと、左手より東稜の岩稜が近づいてきた。頭上には雪庇が張り出し、その右側が山頂のようだ。直接山頂に向かう斜面は傾斜がきついので、雪庇の左端を目指す。頂稜に立つとそこはあんがい狭く、ここから雪庇の左側を3ピッチトラバースすると山頂であった。12時



▲頂稜より頂上を目指す

▼頂上直下の岩崎隊長



40分から14時10分にかけて、野沢井、田辺、岩崎、後藤の順で登頂した。がんばってくれた野沢井に感謝する。その彼は「これでクラブの代表にバカにされなくてすむ。」と喜んでいて。後藤はたばこをふかして雪の上に立て手を合わせていた。ダウラギリに消えた仲間達を思っているのだろう。皆がそろったところで一番高い所を「いっせーのせっ!」で踏んで喜びをわかちあった。普通ならトランシーバーでBCのスタッフとも喜びをわかちあうのであるが、開局してないようであった。毎度働きの悪いリエゾンである。



▲山頂よりK 2、ブロード・ピークG II、G III、G IV

▼8月5日：G I 山頂に立つ



14時30分山頂を辞する。スタカット3ピッチで頂稜のコルに戻り、ここからスノーバー1本で懸垂下降する。恐いラストの役は岩崎隊長が引き受けてくれた。ところがどうしたことか、彼のザックがコルの反対側に滑り出し、氷河の藻屑と消えてしまった。コンロやヘッドランプが入っていたが、あきらめるしかない。2ピッチ懸垂下降した後はずっとコンティニュアスクライミングで下った。岩崎、後藤ペアはずいぶん遅れていて、田辺、野沢井ペアは途中で待っていたが、「さき行ってもいいよ。」の交信で先に帰らせてもらう。いつものことなので、この時特に心配はしなかった。

田辺、野沢井ペアがC 3に着いたのは、ちょうど日没の20時だった。しかし岩崎、後藤ペアは闇夜の中で赤旗を見つけられず、ルートを失ってしまった。トランシーバー交信によると、C 4のプラトローをさまよっているらしかった。23時30分に「ここでビパークする。」と言うので、テルモスを持って迎えに行くことにした。疲れた体に鞭打って支度し、24時にC 3を後にする。2人ともよれ



▲頂稜からの下降

ていて、吐きながら（下の方も漏らしながら）C4のプラトーへ登るはめになった。しかしながらプラトーに彼らの影はなく、ホイッスルを吹いたり、交信したりした結果、左側のかかなり高い所にいるらしかった。とてもそこまでは行けないので、かわいそうだがビバークしてもらうことにした。そして2時にC3へ戻り即座にシュラフにもぐりこんだ。

（記：田辺 治）

ビバーク、急性高山病発病

頂稜からの下りは少々急でラッペリング用のスノーバーを打ち直している足元にぶら下がっている筈の私のザックが音も無く滑り落ちていくのが見えた。自分の持ち物が手の届かない所へ行ってしまう瞬間は何ともいやなものである。が、さらに手を伸ばせば次に行くのは自分であるからあきらめるしかない。

アタック時に必要なものは大体ポケットに入れるようにしていたのでそれほどダメージはなかったが、ガスカートリッジ、とヘッドランプが痛い。

下山はいつものようにノロノロとスカットで降りてゆくが、先行していた田辺パーティーから途中休憩しながら待っていると交信があったので、先にC3に下ってくれるように指示する。その時点では20時頃にはC3に帰幕出来るとふんでいたのだが、プラトー上部で暗くなってしまった。竹ざおを回収しながらアイゼンの跡を追って行くが、遂にルートを見失ってしまう。C3が近いのは感覚で解っていたのだが、前日C3に着いた時、既に上部ルートは雲の中で、我々二人はルートを見ておらず、無論早朝からのアタックは暗闇の中であつたので、今一ルートの判断が出来なかった。20時過ぎC3の田辺パーティーと交信したりしてプラトーを歩き回わりルートを求めるが、今一つはつきりせず。やみくもに歩き、これ以上消耗してしまうのも不安であつたので、22時過ぎビヴァークするとC3に伝える。高度計で7250mの地点、星空で風も無く、ビヴァークには悪くない天気であつた。しかし下の二人からC3より100mほど登ったプラトーの入口まで登り返し迎えに行くと

の申し出があり、泥のように疲れているであろう二人に登り返してもらうのは忍びないので何回かは断ったが、高所のダメージが大きい後藤の事を考え、23時過ぎにプラトーの入り口まで登ってくれるようお願いした。

我々はその間ビバークのテラスを切り、後藤にツェルトを被せ、私はプラトーを右往左往してルートを探したが見つからず。1時前に田辺パーティーがプラトー入り口着。交信しながら、笛を吹いたり、ヘッドランプを照らしてみたりしてお互いの場所を探るが、残念ながら発見する事は出来なかった。登って来てくれた二人には大変申し訳ないが、1時頃ビバークを決め、後藤の元に戻り、二人ともアイゼンを外しビバーク体制に入る。今まで経験した中では割りと上等のビバーク地で、時々風でツェルトがざわめき目覚めるくらいで寝る事が出来た。

翌朝、夜明けと共に目覚めるが、日が当たらない。後藤の事を考えると早く下山を開始したかったが、ビバークした翌朝は日が当たってから行動する事にしているので、待った。その時にはまだ後藤は高所のダメージが強いとしか思っていなかったもので、その日のうちにC2まで下降出来ればと思っていたのである。日が当たれば何の事はない、9時過ぎに下降を始め、11時にはC3に着いた。

C3に着き靴を脱いでお茶を飲んでしまうと、誰からともなく今日はC3にもう一泊しよう、という声に、C2に下降の声は無く、そのまま全員寝袋に入ってしまった。今下界にいて思うのは、何としてもあの時C2に下降すべきだったと思う。後の祭りではあるが…。

C2でデボ品を回収して、さらにC1へ向かう。アイスフォールの出だし1Pのフィックスを回収。タイトロープで数メートル歩いた所で急にロープに力がかかった。振り返るとロープの先に後藤が倒れており、起き上がれないでいる。尋常な雰囲気ではなかったので、その場で田辺パーティーに待機するように連絡を入れる。既に彼は歩ける状態ではなかった。僅か20分の間にこれ程悪化するとは…。歩ける内に少しでも下へと思い、田辺パーティーにまたまた申し訳ないが、登り返してくれるように頼み、私は彼のザックを自分のザックに縛

り付けて下降開始。スノーブリッジやヒドンクレバスの危ない所はダブルボックして下っていったが、途中ヒドンクレバスを踏み抜き、3m近く落ちてしまった。しっかりしたトレースが着いている所だったが、100kg近くになっている私の体重を支える事は出来なかったようで、全く無警戒で歩いていた体は無様にクレバスの棚に引っ掛かって止まった。

クレバスに落ちた事を田辺パーティに連絡して脱出にかかる。アイスクスリューをロープを使って後藤の元に上げて、3本固め打ちにしてフィックスしてもらいユマールで登りに掛かるが1m位登った所で何が起ったか解らないまま下の棚に叩き付けられてしまった。上を見ると後藤が大の字になった形でクレバスの穴を塞いでおり、私は理解した。危ない所だった。次にピッケルを上げて、2本打ち込んでもらった。これは利いているようなので、再びフィックスしてもらい登り返す。大きくハングした出口の下にバック&フットの体制で留まり、まず一個目のザックを揚げるが、出口からは後藤にも引っ張ってもらわなければならず、かなり苦労した。そうこうしている内に、下に田辺パーティが見えると後藤から聞き、二個目のザックは出口の下にぶら下げ、私は氷を背中にしたまま田辺パーティを待つ事にした。この頃から後藤のしゃべり方が緩慢になり呂律もまわらず眠そうに話す様になった。ここで初めて脳浮腫であると判断し、田辺パーティ到着後、即座にデキサメタゾン投与を始めた。

※運動失調の症状は小脳の血栓が原因と思われる。

(記：岩崎 洋)

レスキュー

長いビバークに耐えた2人は翌日11時にC3へ戻ってきた。岩崎隊長は足指に2度の凍傷を負っていたが、後藤は大丈夫だった。4人とも疲れていたのも、大量のジュースを飲んで惰眠をむさぼる。

8月7日、C3をたたんで7時30分に下山を開始する。晴天が続いて本当にありがたい。C3から懸垂下降3ピッチ半でジャパニーズクローワー

ル終了点に着いた。途中になぜか昨年の登山隊のザックがデポしてあり、野沢井が目ざとくスコップを回収する。ジャパニーズクローワールの固定ロープを下り、最後の3ピッチはロープを回収した。回収の時ロープを引くのが重いこと。

C2に11時につき、わずかなデポ品を回収して下山を続ける。ここからは勝手知ったる道である。田辺、野沢井ペアがアイスフォール帯を下ってプラトーに着いたころ、岩崎隊長より交信が入った。「後藤の具合が悪いから、もう一度登ってきて。」思わず田辺、野沢井は目を合わせる。内心「ゆっくりでもいいから、自力で下りてね。」と思うが、その後交信が入らなくなってしまった。「こういう時はきっとロクな事が起こってない。」ということで、サブザックに医薬品と水だけ持って登り返す。体が鉛のように重く、わずか200m登るのに2時間もかかってしまった。後藤のもとにつくと、岩崎隊長がものの見事にクレバスにはまっていた。ザックと本人を引き上げ、記念写真を撮る。問題は後藤で、完全に高度障害だ。平衡感覚と視覚に障害が出ていて、脳浮腫のようだった。デカドロン(デキサメタゾン)10錠(計5mg)と、肺水腫予防のためアグラート2錠(計10mg)を飲む。ここから後藤をアイスフォール帯の下まで下ろすのが、一苦労だった。途中からは、シリセードの体勢にして引っ張り下ろす。この日はプラトーに下りた6000m地点にテントを張った。夜、後藤にデカドロンとアグラートを飲ませ、胃潰瘍の予防にガスター10mgも飲ませる。さらに明日の回復を祈って、岩崎隊長に念力?をかけてもらった。

8月8日、期待むなしく、後藤の容体はさらに悪くなっていた。自力で体を起こすことはかろうじてできるが、座ってられない。自力で立つことも、歩くこともできない。激しい頭痛と視覚障害があり、腕がしびれている。食欲はなく水しか喉を通らない。意識はあるけど、「目をつぶると2度と開けられなくなるような不安」に襲われる。なによりまずいのは、「自分の鼻を手でさわろうとしても、変な所をさわってしまう。」ということで、たんある高度障害ではなく、なにか別の脳の病気を発症したらしかった。日本ならば絶対安静にして、即座に救急車で専門病院に送らなくて

はならないところだ。しかしここはカラコルムの真ん中、BCへの交信もできないし、レスキューヘリも呼べない。酸素はBCにしか無いし、周りに他の登山隊も無い。我々3人だけで下ろさなくてはならないが、登頂後のヘロヘロの体で精根尽き果てている。状況は芳しくないが、それにもかかわらずテントの中では冗談と猥談が飛び交い、絶対に後藤を下ろすという意気込みに燃えていた。どんなピンチの時も、明るさを失わない岩崎隊長と野沢井はえらい。

後藤に薬を飲ませて9時にキャンプサイトを後にする。とにかくBCへの交信ができるC1まで後藤を下ろさなくてはならない。C1からなら日帰りでもBCの酸素を運べるだろう。最初は田辺と野沢井で両側から後藤に肩を貸して支えながら歩いた。後藤は足元がぐにゃぐにゃという感じだったが、こうすれば少しは歩くことができた。1時間ほどこうして距離をかせいでから、ツェルト搬送に移る。後藤をツェルトに包んで3人で引っ張ったが、プラトーが真平な上、雪が腐っているため、渾身の力を込めて引かないと前進しない。ザックを担いでいては大変なので、デポして500mほど進んでは引き返すことにした。6000mの高所はこの手の労働にまったく向いていない。これほど過酷なレスキューはないだろうと思いながら、かたつむりのようなペースで前進した。結局この日はC1の手前500mほどの所に泊まった。1日かけて水平距離で3km、標高で150m下りただけだった。トランシーバーでリエゾンにレスキューヘリの要請をしたが、「ヘリはBC以上の飛行が不可能なので、自力で下山せよ。」との冷たい返事で



▲C1付近に到着

あった。C1までヘリが来た前例が無いため、覚悟はしていたが、がっかりする。C1にデポしてあった食料を田辺と野沢井で取りにいったが、途中でヒドンクレバスに半身はまり肝を冷やす。食べ物を手に入れるのにも命懸けだ。

9日は酸素を取りに田辺と野沢井がBCまで往復することにした。C1から下部の南ガッシャーブルム氷河は、経験者をして「2度と行きたくない。」と言わしめるほど絶悪である。縦横に無数のクレバスが走り、ルートは今にも崩れそうなスノーブリッジを渡ったり、大クレバスをジャンプしなくてはならない。そして1番の問題は、深さ50m以上の巨大クレバスがヒドンクレバスになって、いたるところに待ち構えていることだった。特に午後になると雪が腐って落とし穴がいっそうきわどくなる。1990年に田辺がガッシャーブルムII峰に登った時より確実に氷河の状態が悪くなっていた。実際事故も多い。

我々は2時30分にキャンプを出て、速やかにBCをめざした。ルートはしばらく通らないうちにいっそう悪くなって、きわどい大ジャンプを何度もさせられた。下るにつれて過去のトレールが消えて、闇夜の中でついにルートを見失った。しかしなんとかルートを見つけて、7時にBCへたどりついた。酸素セットを持ったらすぐ出発するつもりだったが、リエゾンの「K2の日本隊に手紙を書け。」というアドバイスに従ったため、時間がかかってしまった。この時期K2には、近藤和美隊長率いる日本勤労者山岳連盟隊が入っていた。彼らはK2を断念し、ガッシャーブルムII峰に転進するとのことであった。詳しい状況は分からないが、今は彼らのご厚意にたよるしかない。HAP（高所協力員）を貸してほしい旨手紙を書くと、それを持ってキッチンスタッフのユーノスがすぐにK2BCに向けて走ってくれた。

キャンプへの登り返しは「お願いだからカンベンして」と言いたくなるほど危険だった。朝は通れても午後はダメな所が多く、そういう時は新しいルートを引くしかなかった。12時間行動を越えるとペースは落ち、つらい登りだった。C1を過ぎ、後は昨日のトレールをキャンプまでたどるだけという所で、野沢井の足元の雪面が崩壊し、彼

▼クレバスの中より



の体はヒドンクレバスに吸い込まれてしまった。タイトロープで確保していたため、3mほどで止まったが、そのクレバスは50m以上の暗黒の口を縦にも横にも開けていた。がっくり疲れて17時50分にキャンプについた。酸素を運ぶのもまた命懸けである。この日は一日中GVとGVIから雷のような音をたてて雪崩が落ちていた。

昨夜から酸素を吸って眠ったため、10日朝、後藤は少しだけ回復したようである。飲み薬のデカドロン（8mg）の注射をブツリと打ってやる。飲み薬より効いたみたいだが、クラッカワーの「空へ」に書いてあるような劇的な効果は現われなかった。我々3人の力では、この先後藤をツェルト搬送で下ろすことは不可能だろう。かわいそうだがスノーブリッジは四つ這いになって自分の力で這い渡ってもらわなくてはならない。それ以外の所は両側から肩を組んで支えながら歩いてもらおう。6時にキャンプ地を後にする。後藤は岩崎隊長にタイトロープで確保してもらい、田辺と野沢井が両側から支えた。田辺と野沢井はロープで結び合ったが、これで確保していることにならない。まずいなあとと思いながら進んでいたら、私の足元に穴が空き、頭までヒドンクレバスに落ち込んだ。これでは命がいくつあっても足りないの、ロープの組み方を変えて、岩崎隊長に他の3人がそれぞれタイトロープで確保してもらうことにした。スノーブリッジでは前後から確保して後藤に這ってもらった。ザックはおととい同様引き返しては運ぶ。この日11時30分にはスノーブリッジが腐って進めなくなり、クレバスだらけで島のような所で泊まっ



た。後藤はがんばってくれたが、水平距離で1kmも進めず、高度も100m下っただけだった。我々もザックの回収のため空荷で登り返すのに、ものすごく体が重く、高所疲労が蓄積しているのを痛感する。そんな我々に病氣の後藤のほうが逆に気をつかってくれた。明日は近藤隊が送って下さったHAPのフセインと、我々のコックのアスカリが、登ってきてくれることになった。感謝感謝である。

11日は朝3時に出発することにして準備をしたが、後藤が半昏睡状態で出ることができない。衰弱が激しくなって、気力や根性でカバーできる段階ではなくなったようだ。とりあえずコンロをつけて朝を待つ。明るくなると後藤は群馬魂をふりしぼって起き上がり、なんとか出発できるようになった。しかし我々の進行スピードは昨日の2分の1に下がり、昼ごろになっても水平距離で500mほどしか進まなかった。

12時にフセイン、アスカリと合流し感動の再会をする。彼らはアーミーから借りた小さなスノーボードと酸素ボンベを1本持ってきてくれた。クレバスだらけの氷河の中でどうやって安全を確保しながらスノーボードを下ろすか、少し悩む。スノーボードは子供用のソリより少し長いぐらいのサイズしかないの、後藤はひざを曲げ、上体も起こしていないといけな。これではスノーボードがすぐにひっくり返ってしまうので、左右から2人以上のサポートが必要だ。結局フセインと田辺と野沢井はスノーボードに自己確保を取ってボードを引き、アスカリと岩崎隊長は重荷を担ぎタイトロープで25m後ろを歩き、万一の時のアンカー

▼決してシゴキではございません！



になってもらうことにした。フセインはこの手のレスキューの経験があるらしく、おそろしく大胆だった。かなり大きなクレバスでも「ノープロブレム」と突っ込み、ボートの長さを利用して巧みに乗り越えていった。ちょっと我々には真似できないワザである。また我々はしばしばヒドンクレバスにはまったが、大丈夫だった。どんどん下ろして2kmほど進み、14時30分に行動を打ち切る。標高差でも250m下ろすことができた。フセインの技術は確かで、スノーボートの威力は絶大だった。BCへもどるフセインとアスカリを見送りな



がら感謝でいっぱいであった。

12日はずっと続いていた晴天期が終わり、一日中曇りだった。今日は近藤隊長ふくめ6名が手伝ってくださることになり、合流するまで3人で後藤を下ろす。今までの晴天でプラトーの氷が露出したため、3人でも順調にスノーボートを滑らすことができた。下部アイスフォール帯の上まで来て、近藤隊を待つ。この先は我々だけでは不可能だ。

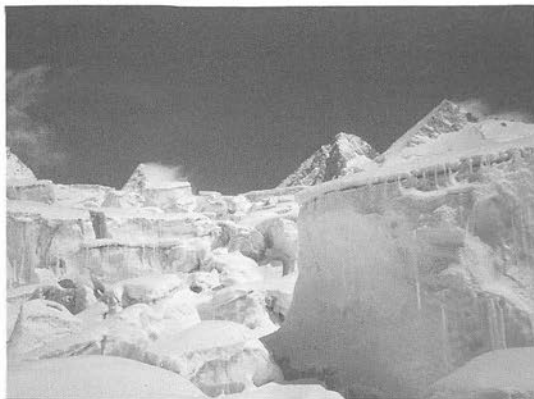
10時に近藤隊長、池田、矢野、青野、川原、フセインの各氏と合流する。挨拶の後、これからどうやろうか？という話になったが、近藤隊長が「そちらの方が状況をよくわかっているだろうから、仕切ってよ。」と、いってくださった。人数が増えたので、スノーボートに6名がついて引っ張り、3名はザックを担いでアンカー役になってもらうことにした。フセインは「ノープロブレム」と強引に突っ込んでいく。そして我々だけなら絶対に真似できない大胆なクレバス越えが、またしても展開されるのであった。昨日より人数が増えた分、がんがん進むことができた。セラックの登りも、6人がかりで引き上げるのであったという間だ。スノーボートにしがみつく後藤は大変だろう。最後のルンゼの3つほど手前まで、アスカリとユーノスがお茶とチャパティを持って迎えに来てくれた。そして15時30分、BCへの最後のモレーンを越えて、全員で大いなる満足を分かち合った。ついに我々は後藤を生還させたのだ。近藤隊の皆様ありがとうございます。そして一番がんばった後藤に心の中で拍手を送った。

(記：田辺 治)



▲スノーボードによる搬出風景

▼困難を極めた南ガッシャーブルム氷河



BC～日本への4日間

16日、この日の朝は急激に寒くなり強風が吹いた。BCへ着いてから続いた悪天回復しそうだ。待ち続けたヘリコプターも今日は飛んでくるであろう。相変わらずアーミーキャンプに滞在し続けているリエゾンにヘリの状況を聞く為にコック達がアーミーキャンプへ出向く。予定ではこの日帰路キャラバンのポーターも到着するのだが、それよりヘリを待つ方が取り残されそうである。午前中、ゴミ燃やし、梱包などの作業を行っているとリエゾンが血相を変えてBCにやって来た。「すぐにヘリが来るので準備しろ」と言う。いそいで後藤を連れアーミーキャンプへ急ぐ。すぐに来るはずのヘリは結局1時間半ほど掛かってやってきた。雪煙をあげ降りてきたヘリに乗り込むと爆音で聞こえないが、どうも後藤以外の私とリエゾンは乗せられないと言っているらしい。一人で行動できない後藤を一人にはする事は出来ない。それ以上に歩いて帰りたくないリエゾンは必死である。結局3人乗り込む事を許可されアーミーキャンプを飛び立った。あっという間にアブリツ氷河を下りチョゴリザが間近に迫る。チョゴリザを眺め今回の長かった夏を振り返る。コンコルディアで観光客らしい人々を乗せ、更にパイユでは降ろされた。「これはレスキューヘリではないのか!」とリエゾンに詰め寄るが、当のリエゾンはいかにも英雄気取りでマスコミの取材を受けている。結局ここで2時間も待たされ、更に数人乗せて出発。風景は雪と岩の世界から緑が現れ心が和む。スカルドではヘリに同乗したスカルド在住のグレック

さんが病院の手配など色々世話を焼いてくれた。スカルドの病院はそこそ立派に変わっていて、97年私が通院した時とは大きく変わっていた。後藤はこのまま点滴を受け入院。ホテルに戻ったのは既に11時を過ぎていた。

17日、飛行機でイスラマへ帰る予定だったが、甘かった。病院で緊急用の書類を書いてもらいそれからPIAオフィスでチケットを発券してもらうのだが思いのほか時間の掛かるこの国、結局明日の飛行機となってしまった。病院へいくと後藤は点滴のおかげで随分顔色が良くなっている。果物やビスケットも食べられる位になっていた。引き続き点滴を受ける。

18日、早朝、病院から後藤を連れ空港へ。手続き等はアユブ氏に色々手を焼いて頂き今回は本当に内外問わず色々な方々にお世話になった登山だった。

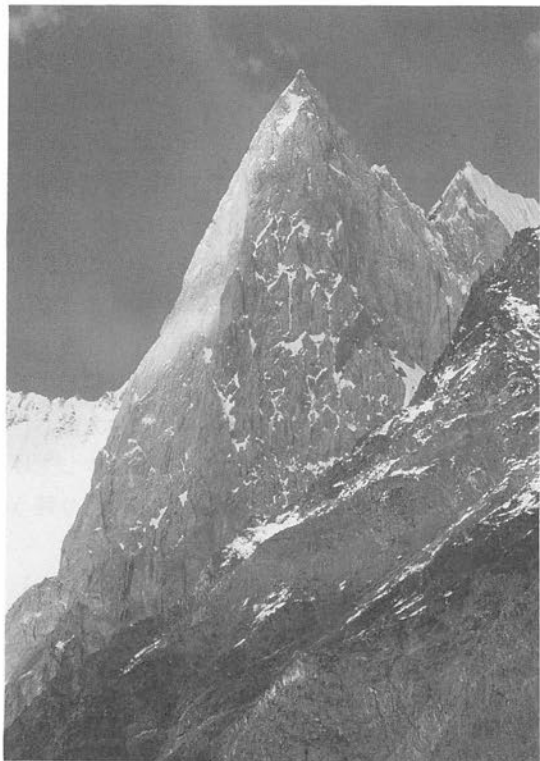
往路25時間掛かった道のりも50分でイスラマバードである。空港には恵子さん、ベヘラムの出迎えを受け、イスラマの病院へ。この病院中々の設備で看護婦がなんと女性?なのである。点滴を受け、ニッパトラベルのご厚意で後藤はラベンダーホテルで出発まで過す。私は久しぶりのビールと恵子さんの手料理に慌ただしく舌鼓。しかし9時には再び空港へ行き、一路日本へ。19日、定刻に成田着。「境町山の会」の方々の出迎えを受け、後藤は群馬、藤岡の病院へと入院した。

(記:野沢井 歩)

帰路キャラバン

帰りのキャラバンはゴンドコロ峠を越える予定であった。そのためマチュルー村のアリという男に頼んで、8月16日、彼の村のポーター17人に、来てもらうことにしていた。しかし16日に来たポーターは1人だけで、他のポーターはどうやら13日から3日続いた大雪に捕まってしまったらしかった。その後17日も18日もポーターは来ず、やむを得ず18日午後、アーミーのロバをチャーターしてシャクリンへ移動した。ここには大勢のポーター達がいたが、すべて同じくゴンドコロ峠を越える近藤隊のポーターで、我々のポーターは1人もい

▼シャクリーンから見る無名岩峰



なかった。岩崎隊長は「田辺さん、近藤隊と一緒にゴンドコロ峠いいよ。」と言い、近藤隊長も「うちはかまわないよ。」と言って下さったが、凍傷の隊長を1人残して、さっさと帰る気にはならなかった。19日、近藤隊はゴンドコロ峠へ出発したが、我々のポーターはいっこうに現われない。これはどうもポーターのアレンジを頼んだアリのチョンボのようだ。パキスタン登山におけるトラブルの内、3分の2は人的な原因によるが、今回もまたその被害をかぶってしまった。今日はアーミーのロバは休日とのことで、シャクリーンに足止めとなる。怒っても何にもならないので、ゆっくり休む。15時ころ、どこから情報を得たのかニコニコしながらポーターが3人やって来た。3人だけではどうしようもないので、我々もニコニコしながら握手するしかなかった。しかしこれは大失敗だった。3番目のポーターは何とアリ本人で、我々はアリの顔を忘れていたため、ぶん殴るかわりにおろかにもニコニコしていたのである。ああ情けない。

夕食の時、事の顛末がわかった。アリはマチュルーのポーターをつれてゴンドコロ峠を越えよう

▼帰路キャラバン風景



としたが大雪のため引き返した。そして単身アスコーレに回り、アスコーレのポーター17人をつれてBCを目指した。アスコーレのポーターは通常ゴンドコロ峠は越えてくれない。道が険しいためと、よそ者の土地へ行きたくないためである。アリは途中でゴンドコロ峠越えを話してしまい、ポーター達は帰ってしまった。やむを得ず途中で拾ったポーターと共にシャクリーンへやってきた。逃げ出さなかなっただけ、良心的な男と言えるが、何とおろかなことであろうか。もしもアリが機転のきく男なら、2、3日後に近藤隊のポーター達が大量ゴンドコロ峠を越えてシャクリーンに向かうので、彼らと一緒に行くことを考えただろう。またアスコーレのポーター達には、「アスコーレ回りで帰るよう、隊長を説得してみるから。」と引き止めただろう。一方我々はアリの連れてくるポーターとだぶることを恐れて、これまで新たなポーターを手配できなかった。顛末が分かった以上、明日朝1番にアスカリにポーターを呼びに、アスコーレへ走ってもらうことにした。ポーターが来るまではアーミーのロバで少しずつ前進する。こうしてゴンドコロ峠越えは夢と消えた。私はバルトロは4回目だが、1度もゴンドコロ峠を越えられなかった。よほど縁がないのだろう。

ロバと共に、20日グレII、21日ウルドカスとキャラバンを進め、22日からはポーターでパイユへ、23日コラホン、そして24日ロードヘッドのトンガルへ到着した。途中ガーネットをたくさん拾うことができた。25日ジープでスカルドへむかう。2個所で大規模に道が崩れていて、ポーターで荷物をはこんだが、夕方にはスカルドについた。予定

より大幅に遅れたため、私は帰国便を遅らせざるを得なかった。パキスタンの登山には忍耐が必要なることをあらためて思い知らされるキャラバンだった。

26日ハイエースをチャーターしてスカルドを出発し、翌27日朝イスラマバードに到着した。日パトラベルには、飛田和夫さんと寺沢玲子さんがおられて、暖かく迎えてくれた。大住恵子さんも交えて昼食にビールを飲んだら、急に涙が出て困った。岩崎隊長もパキスタンスタッフに抱かれて泣いていたようで、大住さんが「普段感情を外に出さない子なのにねえ。今回はよっぽどこみあげるものが、あったのねえ。」と話した。その隊長は督永忠子さんのデスクの下で昏々と眠っている。精神的にも肉体的にも消耗きった登山だったが、我々にできることはやり尽くした。もう1度同じことをやれと言われても無理だろう。後藤の1日も早い回復を祈りつつ、僕たちは暖かいぬくもりに抱かれていた。

(記：田辺 治)

おわりに

今回の登山で個人的にはバルトロ8000m 4座中、田辺は4座目、後藤は3座、岩崎は97年の雪辱をはらし2座、野沢井も97年のリーターンマッチで1座と各自それなりに成果を得たが、主たる目標であった。チョゴリザには手も触れる事無く終わってしまった。残念ながら登山隊としては成功とは言いがたい。また宿題が出来てしまった。それにもまして残念なのはあれだけ高所経験のある後藤の急性高山病である。あらためて高所という、人が住む事の出来ない所へ立ち入る事について考えさ

せられる事が多かった。今の世の中、あまりに安易に行けてしまう8千m峰であるが、一つ歯車が狂ったら、その全てに対応するには、我々はまだまだ未熟だった様である。レスキューに際しましては日本勤労者山岳連盟K2/GⅡ登山隊の近藤和美隊長を始め池田壮彦、矢野利明、清野嘉樹、川原庸照の各氏、スカルドからのフライト、空港での受け入れ、送り出しなど、BCからわずか3日で帰国出来る手配をして頂いた、現地エージェント「ニッパトラベル」の督永忠子、大住恵子、督永強、の各氏、及びスタッフ、出発に際しましては(株)キャラバン、松館正義氏には大変お世話になりました。紙上を借りましてお礼申し上げます。そして応援して頂いた全ての方々有り難うございました。

(記：岩崎 洋)

登山隊の構成

隊長：岩崎 洋 (42) 愛媛

隊員：田辺 治 (41) 愛知

隊員：野沢井 歩 (37) 神奈川

隊員：後藤 文明 (37) 茨城

LO：CP. モハメッド アクタル (31)

コック：アスカリ

キッチンボーイ：ユーノス

ローカル・ポーター：往路48名、帰路15人分(馬併用)



▲登頂を終えて、8月7日撮影：左から岩崎、田辺、野沢井、後藤

地域ニュース

《ネパール》

明大隊がローツェ(8,516m)に登頂

明治大学がローツェに派遣した登山隊(三谷統一郎(46)隊長ら6名)は、10月3日午前9時30分に高橋和弘(28)、加藤慶信(26)、森章一(27)の3隊員が登頂に成功した。

片山右京がサガルマータ(8,848m)断念

サガルマータの登頂を目指して南東稜から挑戦していた片山右京(39)は、10月5日、8,700m地点に達したが時間切れのため登頂を断念した。

北海道山岳連盟隊が未踏峰に挑戦

道岳連では創立50周年を記念して、新しく開禁されたパルチャモと対峙している未踏のテング・ラギ・タウ(6,943m)に登山隊(江崎幸一(50)隊長ら5名)を派遣する。登山期間は、2002年10月～12月を予定している。

《中国》

同志社大隊がロンライ・カンリに初登頂

未踏のロンライ・カンリ(6,859m)に挑戦していた同志社大学隊(和田豊司(56)隊長ら5名)は、9月24日午前11時40分に和田隊長、西田克己、坪井兵輔、植田雄介、干田敦司各隊員とシェルパ3名の計8名が初登頂に成功した。

韓国隊がシモ・カンリ(7,240m)に初登頂

韓国のポスコ山岳隊(李股外隊長ら8名)が、チベット内のシモ・カンリ(Shimo・kangri)に9月29日初登頂した。登頂者は、ナム・ヨソモ、リ・ジリエ、リ・ファヒョン、キム・ジェヨン、チュエン・オーイル。

(編注：この山が具体的にどこにあるのか不明であるが、独立峰として7,200m以上の標高を待つ未踏峰があるとすれば、ブータン国境付近が考え

られるが、ガンカール・プンスム問題が解決していない現状では、他の地域の可能性や、標高の問題、独立峰以外などの要素も考慮する必要がある)

チョー・オユーに71歳女性が登頂

10月1日にチョー・オユー(8,201m)の頂上に71歳の神奈川県在住の内田敏子が登頂した。アドベンチャー・ガイズの公募隊に参加しての登頂であったが、内田は2年前にハン・テングリ(7,010m)に登頂している。尚、同隊では9月30日にも高橋和夫(45)、佐藤邦彦(59)、柳田住吉(51)、太田祥子(61)と、近藤謙司(39)、シェルパ3名、10月1日に大蔵嘉福(51)、白岩靖子(63)、花崎洋(59)、シェルパ3名が登頂した。近藤と大蔵は2回目の登頂となった。

一方、JACがチベット登山協会と合同で派遣した女性隊は、10月1日に、チベット側のジジ、ラジ、チャンラの3隊員と、恩田真砂美(35)、柏澄子(35)、大窪三恵(30)の3隊員も登頂した。また翌2日には、日本側の足立道代(29)とチベット側のガイサン隊長(45)、ゲサン・ラチェン(21)、ゴン・ジュエラム(20)も登頂した。

ロンズラ(5,950m推定)に初登頂

ニエンチェンタンラ山群の同峰を目指した伊東亨(72)隊長ら10名が、9月10日初登頂に成功した。73歳を筆頭に平均67歳で編成された。

トピックス

H A J 華甲望年会のお知らせ

歳末恒例となったH A J主催の「H A J 華甲望年会」が下記のとおり開催されます。

記

日時：12月14日(土) 18時～20時

場所：東京、東池袋「かんぽヘルスプラザ東京」

会費：8,000円

内容：「登山報告」ガッシャーブルムI(8,068m)、ニンチン・カンサ(7,206m)

「華甲祝賀会」該当者は、出口當、田村正勝(以上東京)、竹澤雄三(栃木)、西嶋鍊太

郎(石川)の4氏の還暦をお祝い。

申し込み：あらかじめH A J事務局へ申し込んで
下さい。☎ 03-3988-8474 FAX 3988-8502

第15回 海外登山女性懇談会のお知らせ

「ヒマラヤ登山計画と実践」と題し、渡邊玉枝氏と、日本山岳会チョー・オユー登山隊員(予定)を講師にお招きして、8,000m峰登頂の報告をして戴きます。

終了後、場所を変えての楽しい懇親会(別途会費要)を致します。直接講師とお話できます。

記

主催：(社)日本山岳協会海外登山常任委員会

日時：平成14年12月12日(木)18時30分

場所：岸記念体育館会議室(JR原宿駅徒歩5分)

会費：1500円(資料、お茶代)

申し込み：(社)日本山岳協会

☎ 03-3481-2396 FAX 03-3481-2395

Books

ナムナニ峰

2001年秋、関西大学山岳部によって行なわれたナムナニ登山の報告書。

どの大学山岳部も悩みは部員不足で関西大学山岳部も例外ではなくその苦労が窺える。文中の言葉を借りると「水を撒きそれを育てるが結局喰ってしまった…」という風にそこから更に花を咲かせるのに並大抵の苦労があるようである。そんな中、山岳部監督である辻野氏が忍耐強く山岳部員を育て、山にどっぷり漬かっているOBの奥田氏によってこの登山は実現した。実際、現役部員の山田氏とOBの奥田氏2人の登山となったが、冬山2年目の現役山田氏を連れて手軽な山へ逃げずあえて西チベットのナムナニ峰を選んだ事は立派だと思う。そしてこの現役部員山田氏にヒマラヤを登る挑戦者としての資格を付ける為富士山へ10回の登山を課す。それは奥田氏自身8000m峰登山に際し御殿場に1年間住み込み毎週のように富士山を登りそして始めて自分が8000m峰に挑戦する資格を取ったという体験から来ているのだ。こう

してナムナニ登山という肥料を頂き花は咲いた。後は種が残る事を祈りたい。

ナムナニ周辺の地図、巻末には西ネパールに通いつめ調査、登山を行なっている大西保氏による「西チベット探検史概略」が掲載されている。

A4版、200P(カラー9P)、02年6月発行

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 関西大学信凱

風館内 関西大学体育会山岳部

(記：野沢井 歩)

山を楽しむ

田部井 淳子著

日本国内からヒマラヤを始め世界の山々を舞台に登山を続けている著者ならではのエッセイ集。

印象深い話しは、「もうだめか」と思った事が3回あり、それはすべて雪崩だという。特に天山山脈のトムール峰(ポペーダ)での雪崩はその後の著者の価値観を変えるほどの体験だったという。

山の環境問題にも多数触れている。

岩波新書(新赤版)225P 2002年9月20日

定価(本体780円+税) (記：野沢井 歩)

創立35周年記念行事資金協力者(4)

[3口] 戸谷薫 [2口] 渡辺一夫

[1口] 橋本昌典、岡田和泰、堀内弘和、山本篤

6名 90,000円

総合計146名1団体 3,230,000円

東京集会のお知らせ

日時 11月25日(月)午後7時～

内容 35周年トレッキング報告

場所 H A Jルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分)
又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

ムスターグ・アタ最近の現地情勢

南井 英弘

この夏は、シニア2人〔南井英弘（66）、池谷健（64）〕でもひたすら歩けば登頂可能な7000m峰とのことで、中国新疆ウイグル自治区崑崙山脈のムスターグ・アタ峰（7546m）を目標にした。幸い登頂できたので現地情勢について報告します。

5年連続通ったカラコルム・ヒンズークシュ山域をカラコルム・ハイウエーで通り抜け、クンジュラブ峠越えて中国に入国。タシュクルガンで1泊後ムスターグ・アタの山麓スバシ（3700m）まで車で入り、そこで4泊して4100m峰やBCへの往復で高度順応に努めた。10頭のラクダに荷物を託し、7月9日BC（4300m）入り。1日の休養後、高度順応を兼ねて荷上げ。キャンプ予定地に荷上げ後いったんBCに下って休養し、その後それぞれのキャンプ入りといった典型的な極地法形式で登山活動を実施した。

1. 2002年夏の気象状況

我々がスバシに着いた日に、ちょうど下山してきたスイス隊の隊長に話を聞くと「エベレストに11人登頂後、6月中旬からムスターグ・アタ入りしていたが毎日のように強風が吹き、大雪が降り、わずか1日の晴れ間を利用して3人がやっと登頂できた。こんな意地悪な山はない。気を付けよ!」と教えてくれた。その後も雨、雪、強風、雷が毎日のようにあり、2日として晴れ間が続くことはなかった。私達はアタックを前にBCで3日間の静養をしたが2日目、3日目ともにBCでもかなりの降雪があった。吹雪の中をC1、C2入りして好天を捕えてC3経由アタックすべく腹をくくっていたが、全く幸運なことにC1入りした日から5日間ガスが出たりしたものの絶好の登山日和が続いた。BCに帰りついた翌朝から2日間かなりの降雪があった。撤収日の朝は晴れていたが正午頃から悪天となり、その翌日にはスバシまで雪が

降る大荒れとなった。積雪量はBCで夜半から朝まで多い時は20cm、C2を建設後6日目に再訪問したときには、吹きさらしの氷河上にかかわらず1.5m近くの新雪でC2のテントの頭が僅かに出ている程度だった。悪天候と共に気温も低くBCでも氷点下になることが度々だった。C3を出発後、太陽が照りだし8時過ぎの気温が氷点下21度であったことからC3の早朝は氷点下25～30度近くになっていたことでしょう。不名誉な事に私は足指に、仲間は両手指に軽症ですが凍傷を負いました。

2. ムスターグ・アタの山麓とBC周辺

山麓の基地となるスバシは中国内のカラコルム・ハイウエー沿いにある。タシュクルガンとカシュガル間の定期バスを利用することもできるし両都市から大小の車をチャーターして容易にスバシ入りする事も出来る。スバシには比較的きれいな氷河からの融水が流れておりキャンプには適している。ただしこのスバシにはキルギス系現地人のパオが一軒あるのみでテントを持参しない限り宿泊所は無い。登山隊はスバシからBCまでラクダで荷上げするのが一般的である。我々もラクダ10頭に隊荷を積みBC入りしたが、費用は1頭200元（注：1元は15円）であった。BCまでの道はマウンテンバイクで登る登山者がいるほどなだらかで踏み跡がしっかりしている。また一般人には許可されないが、BCまで中国科学アカデミー氷河研究班のトラックや小型4駆車も入っていた。



▲夏村付近からムスターグ・アタを見る

ベースキャンプ地は氷河末端部のモレーンと尾根の支稜に囲まれた窪地にあるため、強風から守られ、中央にモレーンからの融水が終日流れており快適なキャンプ地である。夏場は現地人によって食堂が運営され、誰でも何時でも利用できる。ヨーロッパ各国からの公募隊の大半は3食この食堂を利用していた。ちなみに1日3食で120元とのこと。利用者の評価は質量共に満足しているとのことだった。登山者がいる限り新疆登山協会から各登山隊に派遣されたリエゾンオフィサーがBCに駐在しているが、彼らもこの食堂で喫食していた。食堂用大テントの他にシャワー用の背の高いテントまで設営している公募隊もいたが、現地人の運営するシャワー小屋もあったのには驚いた。ヤクの糞を燃料にして約30ℓの湯をシャワーとして利用していた。(1回20元)。寒い朝でも利用しているヨーロッパ系の登山者を見かけた。また鉄板囲いの男女別トイレがあり、女性には概ね好評のようだった。BCからC1までの荷上げはロバが利用できる。ロバはBCに沢山見られ、ロバ使いも常駐しており吹雪の中でも作業していた。(ロバの荷上げは1kg8元)。C1とC2間はキルギス系の人夫が荷上げ、荷下げあってくれる。このような仕事にあぶれた現地人たちの娯楽はビリヤードらしく、夜明けから暗闇がせまるまで(つまり1日中)、吹雪の日には大きい透明のビニールシートで小屋がけをつくり玉突きゲームを楽しんでいた。1プレイが一人1元、イスラム教徒らしく勝負に金は賭けていないようだ。なお、登山後に天山南路のシルクロードをカシュガルからウルムチまで車で旅しましたがその間どこでも携帯電話は通じました。ただしムスターグ・アタ付近はまだ開発されていませんでした。

3. 登山者

BCには常時100近くの大小テントが張られ、100人以上の登山者がいたが大半は公募隊の参加者でヨーロッパ系が多い中、ブルガリア、キルギスの公募隊もいた。フランスの公募隊は6カ国から9人の参加といった典型的な国際公募隊であった。我々のように仲間による隊は中国隊とスイス隊ぐらいで例外的存在である。C1以上の氷河地帯を我々は終始アイゼンで行動したが、これも全

く少数派で、中国隊と自転車を担ぎ上げるスウェーデンのサイクリストがスノーシュー(輪かんじき)を使っていた他は全て山スキーで登降していた。私たちと同じ日に登頂したスイス隊の2人はC3からスキーで頂上まで登り、その日の内にBCまで帰り着いたとのこと。またスキーでアンザイレンしながら見事に登降しているペアもいた。スキーヤーに圧倒されるムスターグ・アタからマウンテンバイクで下降するべくC2近くまで自転車を担ぎ上げている人が数人いたのは信じられないことだった。C1近くの新雪が積もった氷河上に直滑降や斜滑降をしたシュプールがあり、そこにベダルの跡が残されていたが、実際に下降している姿は残念ながら見るができなかった。大量の降雪のために、荷上げしデポしたテントなど見失う恐れもある。雪崩ビーコンを利用してデポ地を見つけて喜んでいる登山隊もいた。今回はピッケルを使用することはなかったが、好天が続くと雪面は滑落しやすいブルーアイスに変わるので常に携帯しておいてほしい。同行のアリ・ムサ曰く「5月にはC1とC2の間はスリッピーなブルーアイスのため、多数のフィックス・ザイルをセットした」と。また登山者全員がダブルストックを巧みに使いこなしていた。

4. 食料の調達

蛋白源の肉類はBCの食堂経営者に依頼すれば、30分ほど下にある夏村から山羊や羊の調達が可能です。山羊は1頭300円で、現地人が解体してくれる。新鮮で実にうまい。但し解体料の代わりに頭と皮を要求される。特に頭には脳みそ、目玉、した、顎など一番美味しいところがあるが仕方が無い。羊は山羊の半額で、自炊の公募隊は羊を購入していた。高原地帯のために地元では青菜など一切採れないところだが、キャベツ、ジャガイモ程度なら2、3日で手配してくれた。お米(ジャポニカでおいしい)はやはりスバシから数kmのカラクリ湖の食堂(宿泊も可能)にお願いした方が良さそうです。なお中国入国時、タシュクルガンで通関検疫の際に、パキスタンから持参したバター、チーズ、ミルクなどの乳製品そして賞味期限切れの缶詰類はすべて没収された。

(注)無線機3台も中国政府の許可書を持参して

いないとのことで一緒に没収されたので付記します。

5. 燃料

灯油は冬季には新疆ウイグル地区で販売されているが、春以後は市場から姿を消し、手に入らなくなる。我々の場合はリエゾン・オフィサーとハイポーターがカシュガル近くまで行き、2日間かけて民家を個別訪問し灯油缶に残った灯油をかき集めました。地元の民家では乾燥したヤクの糞を使用していますが、BCの食堂や中国隊は10kgあるいは50kgのLPGボンベを使用していた。このLPGボンベと燃焼器具はカシュガルまたはタシュクルガンで入手可能。また中国科学アカデミー氷河研究班はガソリン発電機まで設置して夜遅くまで点灯していた。ガソリンはカラコルム・ハイウェー沿いのガソリン・スタンドで1ℓ2.5元程度で容易に入手が出来ます。残念ながら我々に馴染みのLPGカートリッジは皆無です。幸いパキスタン経由で入山したので、パキスタンで再充填したカートリッジを持ち込みC1以上のキャンプで使用しました。上部キャンプの極端な低温時にもプロパン（ブタンでは駄目ですよ）を再充填したカートリッジは使用できた。

6. 凍傷と病院

自分たちの不注意で軽いとはいえ手足の指に凍傷を負った。カシュガルに下山後、診断手当てのできる病院を探すのに苦労しました。結論として凍傷の診察、手当てが出来るのはカシュガルの郊外にある中国軍関係の「12病院」（病院の名称）だけです。診察の結果、この病院で研究したといわれる速乾性の液体塗り薬を処方してくれた。我々外国人の場合、事前に山岳協会からでも診察方お願いしてもらう方が良策でしょう。緊急を要する重症の凍傷や低体温症にも、この「12病院」の他は頼れる施設はないようだ。

7. 登山協会と登山証明書

登山申請は「中国登山協会」か「中国新疆登山協会」に直接申請し登山許可書を発行してもらいます。下山後ウルムチを訪問した際に「中国新疆登山協会」のヌル・ムハマト・タシ氏に会い、次の事を再確認しました。ムスターグ・アタの場合、登山隊の入山が決まると「中国新疆登山協会」

傘下の「喀什地区登山協会」がその隊の登山に関する諸手配を請け負うことになる。そのため一人のリエゾン・オフィサーがわが隊に派遣されてきました。具体的にはタシュクルガンで中国入国手続き時からこのリエゾン・オフィサーが立会い、カシュガルに下山するまで一緒でした。リエゾン・オフィサーはBCに終始滞在していたがテント、食事など一切面倒をみる必要なし。

ついでに山岳協会関係の費用を記すと、登山料は1090米ドル、リエゾン・オフィサー費用は日当、食事代を含んで1日1人27米ドル、その他に装備費・保険料として280米ドルでした。

粹な事に「中国新疆登山協会」では登頂に成功した人には要求があれば立派な登山証明書を無料で発行してくれます。これは、なかなか良い記念になります。

8. 米国同時多発テロ事件の影響

中国新疆ウイグル自治区ではムスリムであるパキスタン人の入国申請に対し非常に神経質であった。9月11日以前にパキスタン政府発行のパスポート（訪問先が中国だけに限定のパスポートも含めて）では中国側は受け付けず、事件後発行のパスポート所持者でないとビザ申請は受け付けない。われわれ日本人登山者とパキスタン人が合同で登山隊を結成してムスターグ・アタに挑戦すると言う事で、ハイポーターを合同登山隊の隊員として申請することによってビザは発行された。ハイポーターとして日本人に同行し、出稼ぎのために中国に入国する事は許されないようだ。

私自身のパスポートには過去6年間毎年パキスタンに入国していると共にアラブ諸国を毎年何カ国か訪問しているスタンプが押してあった。その為か中国に入国の際に入国管理官にパスポートの写真と顔を何度も見比べられ、挙げ句は係官がパスポートを持って別室に行ってしまった。上司に話しブラックリストでも調べていたのでしょうか。やがて戻ってきて小生の顔を再度ジロジロ見ながら入国OKのスタンプを押した。新疆ウイグル自治区では独立運動も盛んなようで中国政府はかなり神経過敏になっていることを実感した。

（関西学院大学山岳会々報向け原稿からの抄録）

■ 寸 感 ■

ギャチュン・カン（7,985m）の中国側から挑んだ（スロベニア・ルート）山野井泰史・妙子夫妻は7,600m地点から泰史が単独で登頂後、合流して下降中の10月10日、妙子が雪崩に飛ばされ50mロープ一杯で止まったものの、ここから凄絶なる下降劇が始まった。13日、BCに帰着したものの泰史両手各2指、右足全指、妙子も両手指に重度の凍傷を負い入院加療中。夏のガッシャーブルムIにて脳に障害を受けたHAJ隊後藤文明も言語障害、身体障害のリハビリ中。この夏と秋、現役トップクライマーを襲った高所登山の厳しい現実が、遠足でない「登山」の困難さを物語ってくれる。（山森）

事務局日誌（10月）

- 2日（水） 「山岳文化学会」準備会（山森）
 8日（火） HAJ華甲望年会案内状発送
 9日（水） ヒマラヤ372号発送（山森、野沢井）
 11日（金） 創立35周年記念トレッキング最終打

- ち合せ（T.H.I.尾形、野沢井）
 会費未納者へ督促状発送（113名）
 13日（日） 同上トレッキング隊出発
 15日（火） CMA代表団歓迎会（ランドマーク山森）
 曾曙生CMA前主席逝去（14日）のためCMAへ弔電
 16日（水） 2003年EXP意向伺い発送
 23日（火） トレッキング隊帰国
 28日（月） 東京集会（18名）

ヒマラヤ No.373（12月号）

平成14年11月10日印刷 14年12月1日発行
 発行人 山森欣一
 編集人 山森欣一
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
 萬栄ビル501号
 電話 03-3988-8474
 郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」

東京新聞の山岳書 東京新聞出版局

〒108-8010 東京都港区港南2-3-13
 TEL: (03) 3740-2674(直)
<http://www.tokyo-np.co.jp/>

最新 クライミング技術

ジム・クレメンのフリークライミングからマルチン・アルバイン・ヒックマンまですべてのロッククライマー必読の書。ひとりの技術を単なる「テクニク」ではなく、その意味、選別基準までを詳しく解説。実践的なライニングのポイント、構えがてら細かくアドバイス。

菊地敏之 著

1600円

山小屋の主人の 炉端語

著名な山小屋の主人たちが宿泊の登山者に炉端で語る一人話の取っ置きのお話。

工藤隆雄 著

1500円

すぐ役立つ 山の花雪

【飛騨高山の花博土】として知られる著者の、山の花見術入門書。

小野木 三郎 著

1456円

すぐ役立つ 山の気象と救急法

山の気象遭難を回避するための天気判断と、事故対策に役立つ救急法を平易に紹介。

飯田睦治郎 著
桜井博幸 著

1359円

すぐ役立つ 記念日の山に登ろう

人それぞれの記念日の日付と標高が一致する山はここに。

石井光造 著

1300円

北アルプス やまびと物語

「岳人」に3年余り連載した「山人探訪男達の賦」に加筆、登山をより楽しむための一冊。

柳原修一 著

1456円

北アルプス 山小屋物語

歴史を刻んできた66軒の山小屋をめぐる山と人の物語。

柳原修一 著

1456円

花と歴史の50山 改訂増補 六十歳からの 日本三百名山

「花と歴史の山旅」の第2弾。花の山々を訪れた珠玉のエッセー集。
60歳から13年間で三百座を踏破したスーパ―お爺さんの山行記。

田中澄江 著

1359円

新・山靴の音

選題をむかえた著者が山への思いと、山の仲間との交遊を綴る。

芳野満彦 著

1262円

中高年登山 なんでも百科

「登山に年齢はない」と主張する著者が、より安全により快適に登山を楽しむための、中高年登山の虎の巻。

福島正明 著

1500円

登山の 運動生理学百科

「た」ついたら合理的で安全な登山ができるのかを、ヒマラヤなど高所登山実績を踏まえて、分かりやすくまとめた。

山本正嘉 著

2000円

山書散策

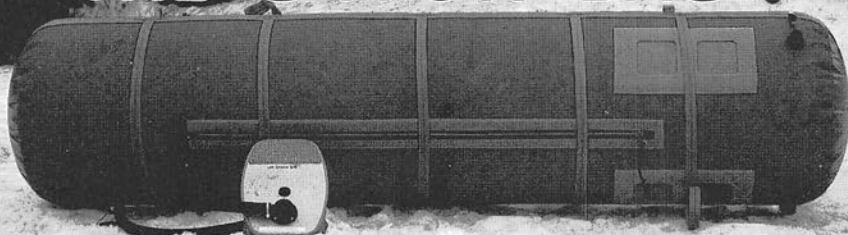
今まで数多く発刊された山書。何を読んだらいいか。そんな時の指針として――「岳人」連載時から好評。

河村正之 著

1500円

※ 本体価格に消費税が加算されます。

THE GAMOW BAG



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店：日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先：株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階

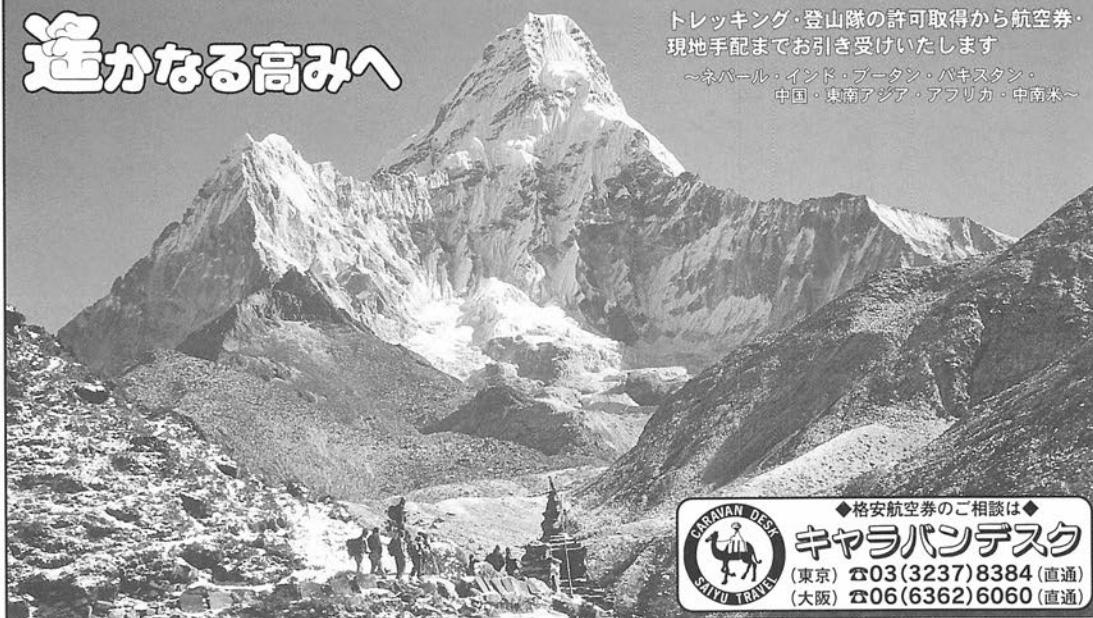
TEL: 03-5245-0511 FAX: 03-5245-0510

(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

遥かなる高みへ

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします

～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～



◆格安航空券のご相談は◆

キャラバンデスク

(東京) ☎03(3237)8384 (直通)

(大阪) ☎06(6362)6060 (直通)

トレッキング・海外登山・シルクロード・秘境旅行のバイオニア ■本

社/〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1

岩波書店アネックス5F

☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396



株式会社 西遊旅行

■大阪営業所/〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5F

国土交通大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

お問い合わせ・お申し込みフリーダイヤル
(通話料無料) をご利用下さい。

西遊旅行ホームページ (<http://www.saiyu.co.jp>)

☎0120-811395

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

●登山本店／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3208-6601
●新宿西口店／〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03-3346-0301
●神田魚山店／〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-6-1(タキビル2F) ☎03-327-0622
●神田本館／〒101-0051 東京都千代田区神田小川町3-10 ☎03-3295-3215
●八王子店／〒192-0081 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426-46-5211
●大宮店／〒330-0802 埼玉県さいたま市宮町1-37 ☎048-641-5707
●高崎店／〒370-0831 群馬県高崎市新町5-3 ☎027-327-2397
●川越店／〒350-0045 埼玉県川越市南通町14-4 ☎0492-26-6751
●甲府店／〒400-0814 山梨県甲府市上阿原町481-1 ☎055-221-0141
●宇都宮今泉店／〒321-0962 栃木県宇都宮市今泉町1560 ☎028-639-9650
●太田高林店／〒373-0825 群馬県太田市高林東町1386 ☎0276-38-0620
●松本店／〒390-0874 長野県松本市大手3-4-24 ☎0263-36-3039
●長野店／〒380-0825 長野県長野市末広町1356 ☎026-229-7739
●新潟店／〒950-0087 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025-243-6330

●新潟とやの店／〒950-0982 新潟県新潟市堀之内南1-16-52 ☎025-241-5134
●仙台店／〒983-0852 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022-297-2442
●秋田広小路店／〒010-0001 秋田県秋田市中通1-4-5 ☎018-884-1771
●盛岡大通店／〒020-0022 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎019-626-2122
●札幌店／〒060-0062 北海道札幌市中央区南二条西4-8 ☎011-222-3535
●北十二条店／〒001-0012 北海道札幌市北区北十二条西3-5 ☎011-747-3062
●伏古店／〒007-0861 北海道札幌市東区伏古一条4-1-45 ☎011-787-0233
●平岡店／〒004-0874 北海道札幌市清田区平岡四条1-43-9 ☎011-883-4477
●外商部(メールオーダー係)／〒169-0073 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03-3200-7219



ICI 石井スポーツ

事務所／〒169-0073 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004